

[読む館長講座④]

東北歴史博物館館長講座概要

2022年7月23日

「東北グローバル考古学 part2—原始・古代のロマンと科学—」④

ヴィーナス像から土偶まで

阿子島 香

はじめに

今回は、世界の比較考古学の観点から、石器時代に人類が残した女性像の中から、いくつかの群像を取り上げて、それらの意義を考えてみたいと思います。おそらく私達に最もなじみ深いのは、縄文時代の土偶でしょう。いろいろな文化財の紹介のなかでも、土偶は人気があります。「土偶女子」と言われるサポーターの方々もいらっしゃいますし、史跡のある町などでも、キャラクターに迎えられます。ハナちゃん（仙台市、「縄文の森広場」の、ハート形土偶をモチーフにした広報ゆるキャラ）、シャコちゃん（つがる市木造の、世界遺産「亀ヶ岡石器時代遺跡」出土の典型的遮光器土偶）、めがみちゃん（山形県舟形町、西ノ前遺跡出土の国宝土偶「縄文の女神」）けっぱつ（結髪）ちゃん（山形大学附属博物館所蔵の、縄文晩期終末の結髪形土偶で、胴体と左足とが、約90年振りに再会した）ほか、いずれも親しみやすいことですが、地域ゆかりのみなさん、元はどのような土偶か、思い浮かびますでしょうか？あるいは模型やグッズなど手に取ってみる機会はありましたでしょうか？土偶のほぼ100パーセントは、女性像です。講座では、多くのスライドで例をみながら、ユーラシア大陸のヴィーナス像の流れの中で、縄文土偶の意義を再考してみたいと思います。

縄文土偶と日本文化の基層

縄文土偶の中には、奇怪な姿に見えるものもあります。現世とは別の超自然的な世界（異界）とのつながりもあるようです。しかし、じっと見つめると愛らしさを感じることでしょう。人間にとって、「人形」というものが持つ普遍的な意味と役割を、土偶たちも有しているからでしょう。また日本文化の伝統では、古来「モノ」に生命を見出し、感じる意識には、あまり違和感はありません。アニミズム的思想の源流があります。生きとし生けるものには魂があって、大きな超自然の力と関係し、精霊（カミ）が宿る、といった感じ方ですね。生命を失った者は、別の世界に行くが、やがて再生する「生命の循環」の思想でもあります。モノを送る「送りの儀礼」から、生命の再生を願います。カミは「依り代（よりしろ）」に宿るものです。このような情緒は歴史に深く根ざっていて、古代日本人の固有信仰、ないし原始神道的な昔から受け継がれてきました。ヒト、動物、モノを画然と区別する、西洋世界

の感じ方とは、かなり違います。話は飛びますが、今や現代日本文化の粋は「マンガ」で、世界中を席捲しています。マンガのキャラクターは、ヒト、動物、モノを問うことなく、それぞれが生命と魂を有していても、私達に違和感はありません。この芸術ジャンルの深層には、日本文化の特質があるようにも思います。

縄文人の「第二の道具」概念

さて、人間をかたどった土製品は、世界各地の諸文化に、繰り返し現れてきました。縄文文化の場合は高度に発達した土器文化があつて、装飾や文様に象徴性も具備する一方で、土偶が代表的な種類になります。が、ほかに石偶、(岩偶)、角偶、などもあり、石器や骨角器と同じ材料で製作されています。また類似した意義が推定される遺物を考えると、岩版、土版、石冠、独鈷石、石棒、石刀ほか、何か実用的ではないような種類の遺物は、各種ありますが、それらもまとめて考察することも重要です。非実用的な種類の道具を、小林達雄氏は「縄文人の第二の道具」と名付けました。縄文時代の後半に顕著になってくる「第二の道具」は、中期、後期、晩期、それぞれに盛行する種類に特徴があり、その時期の文化全体の性格をよく反映しています。

中期には大型の石棒祭祀があります。形は近世の道祖神に似ているものもあり、性神崇拝の男根形の源流とも考えられます。白石市大鷹沢で祀られている石棒は、付近の縄文遺跡(出羽津堂)の時代のものでした(白石市史通史編)。東北地方でも土器にはグルグルの渦巻き文様が盛行しました。それら中期大木式の雄渾な姿は、中部高地(水煙土器)や北陸(火焰土器)とも時代の雰囲気としての共通性をもっていました。晩期の東日本は、亀ヶ岡文化の影響下に覆われますが、青森県に中核がある「亀ヶ岡文化圏」は、第二の道具が異様なまでに発達したことが特徴的です。土偶も、中空(内部が空洞)に制作された大型遮光器土偶があります。

中期の集住(定住)のムラ、後期の冷涼な気候の下、分散した村々の共同祭祀の場であつたストーンサークル、晩期の精巧で繊細な土器や、漆製品など工芸が発達した「手わざ」への傾倒など、縄文人の生活全体の仕組みを維持していくためにも、第二の道具は不可欠のものでした。「遊び心」が重要であつたとしても、厳しい共同体規制による行動規範の強さが、集団の生存のためには必要なことだつたと歴史的な評価ができるでしょう。第二の道具、各種が持っていた意義には諸説がありますが、いずれにしても、縄文人の生活における発達した高度な精神性を示すものと言えます。

クロマニオン人の象徴的思考

人類が象徴的な思考を発達させて、さまざまな芸術を作り出すようになったのは、新人の時代になってからでした。ヨーロッパでは、クロマニオン人の到来以降のことです。旧人たち(ネアンデルタール人)は、芸術を作り出すことは皆無、といていい状況でした(何か粗雑なものでも見つければ、それが大発見とされるようなレベルです)。クロマニオン人は、

フランス南部とスペインを中心にして、高度な洞窟壁画の芸術を开花させました。フランス・カンタブリア芸術と総称されます。約3万5000年前から、約1万年前まで、後期旧石器時代の全体を通して、洞窟壁画は制作され続けました。しかし、それらの分布する地域は限られていて、集中が認められます。洞窟壁画では、人物像を表現することは、非常に稀でした。それらは、奇怪なデフォルメされた姿で描かれたり、線刻されたりしました。半人半獣の奇怪な姿の呪術師といわれる画像も有名です(フランス、レ・トロワフレール(三兄弟)洞窟)。

漆黒の闇が支配する、洞窟の奥深く、動物たちと抽象記号とが、決まったコードの原則に従って描かれ続けました(ルロワ＝ゲーラン学説)。日常生活の場とは、全く別な空間と原則があり、ほの暗いランプの光に照らされて、おそらく秘儀めいた儀礼を伴って、壁画が描かれました。どのような呪術がなされ、いかなる言葉や音楽があったかは、具体的には未だに不明です。クロマニオン人のシンボル体系の構造と記号の秩序はある程度理解されましたが、意味の解読は、認知考古学分野の方法も応用する将来考古学の課題ということでしょう。フランス南西部のペッシュ・メルル洞窟「斑点のあるウマと手形」のように、人間の手形がネガティブに残されることも多くありました。手を置いて顔料を吹き付けるとできます。手形から男女を識別するという研究では、女性もおおいに関与していたとされます。(クロマニオン人の壁画美術については、令和3年度館長講座概要 **第5回「美術と思想の起源」**参照)。

世界最古級のヴィーナス像として、ドイツのホールフェルス遺跡から出土した事例を紹介しましょう(スライド)。オーリニャック文化に属し、年代は約35000年前になります。チュービンゲン大学のチームが調査しました。高さ6cm、マンモスの象牙に石器で彫刻した女性小像で、顔は表現されません。大きな乳房に豊満なプロポーション、陰部の表現もあります。足先は尖っているだけです。女性であるということが強調されるという点で、その後ずっと新石器時代以降まで世界各地に存在するヴィーナス像の特色が、すでに表れています。ユーラシア的にも、頭部や顔、手足は無くてもよいが、成熟した女性であるという表現が絶対的に必要な文化現象なのでした。(これは、縄文土偶にも共通することです)。

クロマニオン人の日常空間芸術

一方で、非日常的な「壁面美術」とは別なカテゴリーの芸術も、クロマニオン人たちの普段の生活空間の中に存在していました。総称して「動産美術」(mobile art)といわれますが、ウシやウマの小像、投槍器や骨角製銛先などの狩猟道具の装飾、石材や象牙や骨角を材料にして立体彫刻を行なった女性小像(石器で彫りました)が多数出土しています。居住遺跡の生活面の近くで出土する浮き彫り像(女性像がありますが、野生ヤギやサカナの浮き彫りもあります)などがあります。

生活遺跡の浮き彫り像の例として、ローセル岩陰の「角(角杯)を持つ乙女」レリーフをご紹介します(スライド)。フランス南西部のレ・ゼジー村の近郊に石灰岩地質の岩陰遺跡

があり、20世紀初頭に発掘が行われました。ハシゴやツルハシを使って岩陰堆積層をどんどん掘っていく状況の写真は、現代の発掘調査とはまるで違う雰囲気ですね。当時すでに層位的な認識を以って、石器文化の編年研究が進行していました。日本考古学の歴史を学んでいますと、層位学的編年は、出土遺物（土器）の型式学的分類よりも、あとから展開したという学史的認識になりますが、フランス旧石器では逆で、当初から層位学的編年がありました。この遺跡のように、眼前に累々とした文化層が重複していますから、文化の変遷を地層に見ることになったのは、自然の成り行きといえました。いわば、フィールドの状況が方法論を発達させたわけです。

ローセル岩陰遺跡では、ネアンデルタール人が残したムスチエ文化（中期旧石器）とシャテルペロン文化（後期旧石器初頭）から、クロマニオン人が残した後期旧石器諸文化（オーリニャック文化、グラヴェット文化、下部ソリュートレ文化、上部ソリュートレ文化）までが累積しています。角を持つヴィーナスの浮彫りは、像の高さが47cmあり、1908年にフランス旧石器研究のパイオニアであったブルーユ神父（アッペ・ブロイとも書きます）によって発掘されました。このレリーフが彫られた大きな岩が、グラヴェット文化の層内にあって、グラヴェット型尖頭器、フォン・ロベール型尖頭器、ノアイユ型彫刻刀などの石器を伴っていました。このヴィーナス像レリーフは、2015年に東京の国立西洋美術館での特別展「ボルドー展」にやってきました。初来日とのことでした。私は所蔵先のアキテーヌ博物館（ボルドー）を訪ねた際に、ガラス越しですが熟覧（長時間観察）する機会があり感動を思い出します。

ヴィーナス像の系譜

立体彫刻の女性小像は、「ヴィーナス像」と総称されていますが、ヨーロッパ各地から出土しています。オーストリアのヴィレンドルフのヴィーナス、フランスのレスピューグのヴィーナス、イタリアのグリマルディのヴィーナスなどが、特に有名です。繊細で小さな彫刻には、フランス南西端ピレネー地方のブラッセンピュイ洞窟の「頭巾をかぶった乙女」頭部（象牙製）があり、切手や本の表紙にも登場する「有名人」です。多くのヴィーナス像は、頭部から足先まで、かなり一定のプロポーションの約束に従って制作されています。全ヨーロッパ的な広がり出土品が、しかも素材が象牙、岩石、粘土（土偶）と多様なのに、プロポーションの原則が共通というところが、不思議に感じます。ギャンブルの『ヨーロッパ旧石器時代のセトルメント』（Gamble 1986, p.327）の図のように、頭部と足先、腰部左右を頂点とする、ひし形になるような設計原則さえ見て取れる形態的な共通性があり、驚くべき類似と思います。

女性的な特徴が強調されるのが通例です。男性像は極めてまれです。後期旧石器時代を通して制作されましたが、特に隆盛した時期があります。約2万年位前の「グラヴェット文化」という時期に多く認められます。それらの分布は、フランコ・カンタブリア壁画美術の範囲を遥かに超えて、全ヨーロッパ的な広がりがあり、遠くシベリア方面にまで出土例があ

ります。生活遺跡の中にあるヴィーナス像の系譜は、遙か日本列島（大分県岩戸遺跡の、こけし形石偶）まで到達していました。おそらく縄文土偶の源流は、このような後期旧石器時代のヴィーナス像の系譜に求められると考えられます。

世界最古の土偶制作遺跡

世界最古の土偶は、チェコ共和国南部（モラヴィア地方）のドルニ・ヴェストニツェ遺跡から発見されており、粘土を焼成して制作しました。年代は非常に古くて、約 26000 年以上前です。年代は古めですが、プロポーショナル的には、グラヴェット文化の様式に従って制作されています。高さは 11.1 cm、幅は 4.3 cm で、やはり手の中に入るくらいのサイズです。ドルニ・ヴェストニツェ遺跡はオープンサイト（洞窟や岩陰ではない開地遺跡）で、後期旧石器時代前半期の居住遺跡です。31000 年前～27000 年前の居住とされます。カマドがあって、粘土を成形した土偶を焼成した世界最古の遺跡として知られています。多数の動物形土製品（動物土偶）も焼成されました。しかし、容器、煮沸道具としての土器は使用されていませんでした。（なお世界最古の土器は、東アジアで 2 万年～1 万 5 千年前頃に、各地で出現しました）。土偶の発見は 1925 年のことで、チェコ国立モラヴィア博物館に収蔵されていますが、めったに実物を見学することはできない宝物的扱いとのこと。残念ながら、私も実物を見たことはありません。レプリカを、フランスの博物館にて入手しましたが・・・。

ここでは、生活遺跡から埋葬人骨も発掘されていて、象牙を彫刻して制作した女性頭部像が副葬されていました。クロマニオン人の女性には、頭蓋骨の分析から、障がいがあったと考えられるとされます。そして、女性像にも左の顔部分に、同様の表現がなされていることから、最古の女性シャーマンの存在が推定されています。

岩戸遺跡のこけし形石偶

ヨーロッパ・グラヴェット文化のヴィーナス像からの流れが、日本列島に到達したことを示す稀有な事例は、大分県豊後大野市（旧清川村）、岩戸遺跡から出土した「こけし形石偶」（こけし形石製品）に見られます。芹沢長介先生により 1967 年に発掘されました。スライドのように、照明の調節によって、こけし形の頭部に両眼と口の凹みが確認できます。胴部は円筒の形で、全長 9.5 cm、手のひらに載るくらいのサイズです。多数の後期旧石器（第 1 文化層）と共に、完成品 1 点、未成品 2 点が出土しています。

シベリアのバイカル湖西方に、後期旧石器時代のマリタ遺跡があります。ここから出土したヴィーナス像は、マンモスの牙を彫刻して制作され、ほっそりとしたプロポーシオンで、頭部に被りものが表現されたような例もあります。顔の表現は、有無があります。形が、岩戸遺跡のこけし形石偶に似ている例もあります。同遺跡からは鳥形（白鳥形）の小像も見つかっています。

豊穡の力、「地母神」の系譜

時代は下り、新石器時代の農耕社会が発達し、そして古代文明に至る間にも、土製の女性神像の系譜があります。スライドは、メソポタミアのハラフ文化の豊穡の女神像で、紀元前 6000 年～5100 年とされます（ルーブル美術館）。円筒形の頭部に顔の表現はありません。一方で、豊満な乳房、くびれた胴、ふくよかな臀部から太腿、そして足先は尖って省略されます。インダス文明のテラコッタ女神像は、プロポーションが同様に、女性の豊かな産み出す力を象徴しているようです。メーガル遺跡出土で、紀元前 3000 年とされます。目と口は表現され、肩にローブ状の文様が見えます。新石器時代から古代文明まで継続する、これら多数の造形は、広く「地母神像」と解釈されてきました。大地の母なる力が、農作物の豊穡をもたらし、人間や動物の多産の恵みとなる、広く持たれていた信仰を示すとされてきました。逆に、気候変動や天災、不作などに対して、人間の力を超越する存在に祈るということでもあります。

縄文文化は狩猟採集漁労を生業の基盤としていましたが、しかし大規模な定住集落を発達させました。新石器時代の段階にあたる縄文前期～晩期に、各種の土偶が発達することは、興味深いところです。（館長学説では、縄文草創期～早期は、ユーラシア中石器時代の段階にあたる。令和 3 年度館長講座概要 **第 8 回「縄文への道」** 参照）。

最古級の縄文土偶

最古級の縄文土偶は、約 13000 年前の草創期後半から出土例があります。三重県弼見井尻（かゆみいじり）遺跡の土偶はシンプルな女性像という造りで、顔も手足もありません。1996 年の発見で、長さは 6.8 cm と小さなものです。

同じ頃、約 13000 年前、滋賀県相谷熊原（あいだにくまはら）遺跡からも、小形土偶（高さ 3.1 cm）の出土がありました（2010 年）。頭、腕、脚はなく、乳房とくびれた腰から、女性像と知られます。

初期の土偶は、同様に胴体だけのものが普通で、古くから知られているのは茨城県花輪台貝塚出土の、ヴァイオリン形土偶です。縄文時代早期前半の撚糸文文化期に属します。高さ 5 cm ほどの小型品です。

縄文草創期の線刻女性像

草創期では、愛媛県上黒岩（かみくろいわ）岩陰遺跡で、小さな薄い礫（緑色片岩）に線刻で女性像を刻んだ「女神石」が知られています。標高約 400m の山間部に位置する岩陰遺跡は、縄文草創期の隆線文土器の時期（第 9 層）、草創期の無文土器の時期（第 6 層）、早期（埋葬人骨が発掘）の重層遺跡で、1960 年代に発掘調査されました。約 12400 年と年代測定された（C14）、隆線文（隆起線文ともいいます）土器の文化層から、10 数点の線刻礫が出土しました。較正年代では、約 14500 年前になります。高さ（長さ）が 4～6cm と小型でやや扁平な石に、長い頭髪の表現、乳房の表現、腰に縦方向の並行する条線多数（腰褌と

解釈)などが細く線刻されています。乳房の表現を有するものと無いものがあり、後者は省略形、子供、男性など各説があります。春成秀爾氏(2009)は、ヨーロッパ、ウクライナ、シベリアの後期旧石器時代ヴィーナス像との詳細な比較研究を行いました。上黒岩のヴィーナス像はすべて女性であり、ユーラシアの諸例との類似性を持つと結論づけました。出産に関わる護符ではないかとの学説を提起しています。

上黒岩岩陰の線刻礫のヴィーナス像は、日本列島の時代区分では縄文草創期ですが、世界的に比較すれば、ヨーロッパのマドレーヌ文化期とほぼ並行する年代です。ドイツのゲナスドルフ遺跡のヴィーナス像や線刻画像石など、マドレーヌ文化からシベリアを経由しての文化の共通性、つながりという可能性を考えますと、その広大な文化現象の壮大さに驚くことです。

土偶の変遷から

早期から前期、中期と時代が経つにつれて、いろいろな形式の土偶が制作されるようになります。いずれの時期にあっても、東日本が分布の中心です。後期、晩期になると各地方では、いっそう特徴的な土偶が作られますが、講座では、縄文土偶から、地域、時期ごとに特色ある事例を取り上げて、多くのスライド画像を見ながら、解説してみます(すみませんが割愛)。「板状土偶」「十字形土偶」、「山形土偶」、「ハート形土偶」、「合掌土偶」(「屈折形土偶」)、「ミミズク土偶」、「遮光器土偶」、「結髪土偶」、そのほか名称が多くて複雑そうですが、それぞれ時期と地域とにまとまりがあり、明治時代からの縄文文化研究の中で、上手に名付けられてきた由緒があります。類似する形態の土偶に別の分類名がある場合は、分類による包含関係もあります。研究史や文化財指定過程も関係します。近年は、国宝や重要文化財に指定されるに臨んで、個別に特別な名称で呼ばれる女神たちもあります。「縄文のビーナス」「縄文の女神」「仮面の女神」「中空土偶」などです。これらは、分類というよりも「お名前」になるでしょうか。

博物館などでも近年、土偶や縄文の人気の高いことで、嬉しく思います。大英博物館まで出張した特別展示もありました(2009年、続いて東京国立博物館へ)。各地域の博物館の特別展示、企画展示も、趣向を凝らしていて、展示図録も美しく充実していますから、お楽しみいただければ嬉しいです。ですが、土偶たちは小さいので、広い展示空間が得られる企画の場合、大きな部屋と小さなモノとのバランスの問題も出てきます。上からケース内で見下ろす形になることも多く、自立できる土偶と、破損があるが優品、見る方向と照明などのこともあります。皆さん、次に土偶展をご覧になる時には、このような学芸員の苦心にもいくらかの思いをいただければ、望外の喜びでもあります。大学の博物館学、学芸員資格関係科目では、よく話されることですが、土偶の関連ということでご紹介しました。

テーマ展示「宮城の土偶」

当館では、ご承知のように総合展示室の奥に「**テーマ展示室**」が**3室**ありまして、総合展

示室ではカバーできない内容を、常設展の一部として季節により展示替えを行っております。当館の収蔵品公開・解説を主にしております。その内容の一部は、**当館 HP から「過去の展示」**として公開しております。いわば「ウェブ博物館」ですが、縄文土偶については2019年8月～12月のテーマ展示**「宮城の土偶」**を一部画面上でご覧になれます。HPでの過去の展示もどうぞご利用ください。各年度の特別展の概要も、ご覧になれます。

講座では、「ウェブ博物館、館長ギャラリートーク」のように、スライドでご紹介します。大崎市根岸遺跡では、縄文晩期の土偶が、調査面積に比して多数出土しました。大崎市北小松遺跡では、縄文晩期のピアスの表現がある土偶が出土しました。縄文人は、耳たぶに穴をあけて、イヤリングで装身をしていましたが、土偶に同様のピアス表現があるのは珍しいです。(関東地方の後期～晩期の「ミミズク土偶」たちは、土偶がイヤリングをつけています)。大和町摺萩遺跡(約2500年前)は、晩期の亀ヶ岡式土器の研究に大きな成果がありましたが、ここから出土の「X字形土偶」は、全体の形がアルファベットのXに似ているので、このような名称で分類されています。

川崎町の中ノ内A遺跡から出土した中期の土偶(約4500年前)は、立体的で下半身がしっかりと作られ、自立できるようになっています。高さは15.8cmと小型です。顔は表現されませんが、頭は丸い円盤を乗せたように作られています。側面観では、臀部が後ろに突き出している表現で安定感を示します。ここから「出尻(でっちり)土偶」という類型に分類されています。

山形県舟形町にある西ノ前遺跡からは、形がそっくりな大型の優品土偶が出土しました。こちらは、高さ45cmで国内最大、その優美なバランスのとれた姿から「縄文の女神」と名付けられて、2012年に国宝に指定されました。同じ場所から出土した別の土偶破片47点も、一括性を重視して「国宝 附 土偶残欠」となっています。(指定物件の場合に、合わせて指定するものは、「附(ついたり)」として含まれます)。「縄文の女神」は、山形県立博物館で特別の国宝展示スペースにいらっしやって、荘厳な照明が当てられ、来館者がじっくりと鑑賞できるように配慮されていました(2019年見学時)。

この中ノ内A遺跡の土偶について、「土偶女子」こと譽田亜紀子さんは、たいへん楽しい著作『土偶手帖』(世界文化社)の中で、ニックネームを与えています(40頁)。「影武者?」ですが、私はこれに「うーむ、なるほど」と思いました。その見出しに「私だって女神になりたい」とのひとことが添えられてあります。少々コメントさせていただきますと、国宝にこそ遠いけれども、「私も元から女神ですよ」がより正確であります。失礼しました。そうです。土偶は皆さんが、縄文人の女神なのでした。ジェンダーフリーな表現なら、さまざまな恵みをもたらす精霊(カミ)の依り代と言うこともできます。

土偶をCTスキャン

土偶は何のために作られ、どのような役割を果たしたかは、今なお諸説があり、確定していません。女性像が破損して出土するという状況は、縄文人の有していた世界観や宗教的情

念を反映しているのは間違いありません。縄文土偶の出土総数は、正確には分からないほど多数出土しています。国立歴史民俗博物館を中心に、全国の土偶の事例をデータベース化する研究が行われ、出土総数は 15000 体以上知られています。土偶は、ひとつの時期でも多様な姿に作られて、素朴な表現の個体も多く、また大多数は破損して土器などの各種遺物と一緒に埋没しています。おそらく、出土総数は 2 万体を超えているでしょう。

土偶の本質に迫るために、制作の技術を研究するという方法があります。ここでは、東北大学で行われた CT スキャンによる分析をご紹介します。現在、弘前市教育委員会に勤務している佐藤信輔氏が、大学院文学研究科時代に、東北大学総合学術博物館の協力と指導で、石巻市沼津貝塚出土の土偶を分析し、成果を同博物館の紀要に発表されています(参考文献参照。東北大学附属図書館HPの「機関リポジトリ」から、どなたもダウンロードできます)。

沼津貝塚出土品は、毛利総七郎・遠藤源七コレクションの一部が、東北大学に寄贈されたものです。縄文後期～晩期の土偶 99 点を対象に分析しました。スライドに見ますように、後期の土偶では、粘土の塊りを順次、継ぎ足して行って形を整える方法が明らかになりました。中心になる粘土塊の周りに、小さな粘土を細かく付け加えるようすが、CTによる内部透視で、判明しました。粘土塊と粘土塊との境界が、画像では線で示してあります。また、内部に小さな空洞が見える資料もあって、その形が 7 mm位の炭化物のようで、何かの種子を埋め込んだ可能性が推定されました。

遮光器土偶から結髪形土偶へ

縄文晩期後半になると、遮光器土偶に引き続いて、似ている形の土偶が制作されます。土偶の髪型に特徴があり、角状突起形、結髪形、刺突文土偶などと呼ばれます。蔵王町鍛冶沢遺跡から優品が出土しています。地元の学校(当時白石中学校実務学級)の教材になったこともあり、「フェルの神様」と呼ばれて生徒たちにも親しまれました。実りがフェル、良いことがフェルの意です。白石城主だった片倉家の子孫、郷土史家でもあった片倉信光氏が管理されていました。現在は、片倉家資料と共に、仙台市博物館に所蔵され、2012年に宮城県指定文化財になりました。

山形大学附属博物館所蔵の結髪形土偶には、ストーリーがあります。山形県寒河江市の石田遺跡から出土した土偶は、旧家安達家に所蔵されていましたが、胴体部と左足部が離れ離れになって、別の博物館にありました。2018年に、郡山女子大学の会田容弘教授が、記憶と観察から、同じ土偶ではないかと気づき、接合が確認されました。さすが考古学者です。土偶はかつて、山形大学にいた考古学者により、脚部が想像復元されていました。山形大学附属博物館では、広くクラウドファンディングを募って、予想を上回る反響により、専門家(奈良の元興寺文化財研究所)の手で、90年ぶりに見事に修復されて、再び「立ち上がった」のでした。この物語は、山形大学のHPで紹介されています。修復完成記念の展示が、ちょうど東北史学会2020年度の山形大会の時でしたので、コロナ禍の波の合間に、私も訪ねて感動を共にしました。

土偶の終焉

弥生時代になると、青森県の初期弥生土器に伴う土製品、石偶、関東地方の洗骨葬習俗に関わる容器形土偶など、わずかな残存的な状況に至り、やがて土偶は消滅しました。仙台市南小泉遺跡から、弥生時代中期の大量の土器や石器（石包丁など）と共に、土偶頭部（幅 9.5 cm）が出土していますが、東北縄文の伝統が稲作農耕社会の中に生きていたことを示すのでしょうか。旧石器時代のユーラシアから、縄文草創期、早期へとつながり、縄文前期から本格化し、中期から晩期の東日本で隆盛した土偶は、狩猟採集社会から農耕社会への変革に伴って、消えていったのです。

西アジアや地中海地方などでは、農業の発展と文明形成の中で制作され続けた女神の造形でした。エーゲ海の文明（キクラデス諸島）では、大理石製のヴァイオリン形ヴィーナス像もありました。一方、日本列島では、あれだけ盛んだった土偶制作は、農耕社会の本格的な展開と国家への胎動の動きの中では、消滅していく運命をたどったのでした。縄文的な思想と、弥生的な思想との落差に、改めて思い至ることです。**縄文土偶は、旧石器時代から新石器時代まで、3 万年以上にわたって北方ユーラシアの広大な地域に広がっていた狩猟採集経済の文化伝統を基層にして、縄文人が定住集落を確立した中で独自の高度な精神文化として発展を遂げたものと位置づけられるでしょう。**世界遺産としての「顕著な普遍的価値」の評価とも関連します。（今年度館長講座概要 第 1 回「世界遺産と縄文みやぎ」参照）。そして基層的な精神文化の系譜は、山野での狩猟採集を主な生業とする少数民族の文化に受け継がれていると考えられ、東北日本でも山野にあまねく存在し安定した恵みをもたらすカミへの信仰として、近年まで受け継がれてきたものと言えるでしょう。

まとめ

女性を象った小像は、ユーラシア大陸で、クロマニヨン人の登場とともに出現しました。ヨーロッパの洞窟壁画が、暗黒の奥深い空間で営まれた儀礼であったのに対して、ヴィーナス像をめぐる信仰体系は、日常の生活空間の中にありました。女性の特徴を強調する造形は、ユーラシア大陸に共通した属性でした。後期旧石器時代から、新石器時代、さらに古代文明の時代まで、いろいろな時期に、いろいろな地域で出現しました。「メガミの像」は、人類の原初の思考体系の現れと考えられます。宗教学的な分類では、アニミズム、シャーマニズムなどとも共存していました。大地の母なる神性（地母神）説も有力です。一般に、豊穰・多産・生活の安定、また出産の平穏などを祈った可能性が指摘されています。縄文土偶は、このような、汎ユーラシア的な大きな伝統の、日本列島新石器時代の特有な文化現象として理解されます。藤沼（1997）の「精霊の依り代」という考え方も、実証的な出土状況を踏まえており、うなづけるところです。

すなわち、石器時代に広範な拡がりをもつ、世界的な共通の現象の一つの発展形として、縄文土偶も評価することができます。豊穰と多産を願う母なる神、いわゆる「大地母神信仰」

は、先史・古代の世界に広がっていました。縄文文化ではさらに、死して産み出す女神信仰、モノは生命を持ち、別の世界に送り再来するという、モノ送り信仰（貝塚文化に共通します。また内陸の集落遺跡での「遺物包含層」も同様の場所と考えられます）も、一体的な宗教観として存在していたように思われます。縄文土偶の解釈には諸説があります。願いを祈願する故意破壊説、安産守り説、病気平癒呪術説、季節の土偶祀り説、その他の考え方も、否定することはできませんが、全体として、縄文ムラの自然の恵みを祈る信仰体系の中に、さまざまな願いと儀礼行為が含まれていたのがあった、土偶祭祀のバリエーションは幅広かったと考えてはどうでしょうか。縄文文化は、地域性も大きい文化でした。

破損部位が、アスファルトの接着剤で補修されている事例も多数あります。土偶は、破損して役割を終えるという以上に、縄文人におそらくは住居の中で大切にされていたようです。住居の主が、ムラの特別な人物ということも、あったかもしれません。縄文人の第二の道具である土面のなかには、岩手県雨滝遺跡出土と伝えられる「鼻曲がり土面」とよばれる例（東北大学所蔵）もあって、トランス状態で別の世界と交流するシャーマニズム信仰の存在も推定されています。

大地の母なるカミの存在への信仰は、農耕文化に限られたものではありませんでした。この意味では、土偶は狩猟採集社会の地母神の姿といえるのかもしれませんが。

今回も、ご清聴ありがとうございました（最後までお読みいただき、ありがとうございました）。

（本稿は、当日スライドも踏まえ、講演内容に補足して加筆し、再構成したものです。また参考文献は、日本語の入手・閲覧しやすいものを選択しています。）

参考文献

青柳正規（2009）『興亡の世界史 00 人類文明の黎明と暮れ方』講談社（学術文庫版もあり）。

江坂輝弥（1990）『日本の土偶』六興出版（講談社学術文庫版もあり、2018）。

佐藤信輔（2019）「X線CTを用いた内部構造の分析に基づく土偶製作技術の研究」『Bulletin of the Tohoku University Museum』第18巻、31-63頁。

仙台市史編さん委員会編（1999）「第2章 縄文時代」『仙台市史 通史編1 原始』、115-280頁。

春成秀爾（2009）「第6章 上黒岩遺跡の石偶・線刻礫と子安貝」『国立歴史民俗博物館研究報告』第154集、485-501頁。

藤沼邦彦（1997）『歴史発掘（3）縄文の土偶』講談社。

渡邊誠（1996）『よみがえる縄文人』学研。